

シリア デデリエ洞窟・中期旧石器の 分類学的研究

庄 司 雅 子

第 I 章 論文の目的

現生人類の起源とその後の進化と拡散に関する研究が近年、大きく発展している。なかでも、西アジア、レヴァント地方における先史人類学的研究の結果が注目されている。すなわち、レヴァントのカフゼーとケバラという2つの洞窟遺跡の調査において、人類化石と石器群とが、明確な層位的コンテキストをもって発見されたことと、理化学的年代測定結果から年代学的議論が厳密におこなわれたことにより、重要な意味を持つことが分かり、先史人類学者間が大きな関心を寄せ、次のような問題が論じられている。それは、ケバラからはネアンデルタールが発見され、カフゼーからは早期新人が発見されたからである。この異なる化石人類が同時代に生存していたという証拠について、編年上、あるいは、系統上の問題であるのか、その解釈が一つの争点となっている。この点に関して、以下の3つの仮説が提示されている。まず1つは、10万年前、レヴァント地方にタブンC型石器群を持った早期新人があらわれ、その後、タブンB型石器群を持ったネアンデルタール人が移住してきて、両者が共存することになったという説 (Bar-Yosef: 1992)、2つ目は、地域的なネアンデルタール人と早期新人とは、レヴァント地方における現生人類の変種であるという説 (Wolpoff: 1991)、そして3つ目は、レヴァント地方は、ヨーロッパ起源のネアンデルタール人とアフリカ起源の現生人類とが、ネアンデルタール人が絶滅するまで共存することになった場所であるという説 (Grün

and Stringer: 1991) である。次に、レヴァント地方の中期旧石器時代遺跡について、石器群と人類化石との関係を見る。スフル、カフゼー洞窟では、タブンC型石器群と早期新人化石が、タブン、アムッド、ケバラ洞窟では、タブンB型石器群とネアンデルタール化石とが共伴する。すなわち、レヴァント地方では、人類化石と石器群タイプとの関係について一つの見通しをもつことが可能である。そこで、デデリエ洞窟は、ネアンデルタールと石器群とを、明確な層位学的関係から検討し、議論できる新たな情報を与えてくれ、また、当洞窟は、死海地溝帯北端に位置しており、レヴァント地方南部に位置するカフゼー、ケバラとは地理的に離れていることから、地理的な変異の問題についても議論できる遺跡である。したがって、本論文は、デデリエ洞窟においてネアンデルタール人骨と共伴出土した石器群に検討を加え、レヴァント地方における中期旧石器時代のネアンデルタール人と早期新人とをめぐる争点について、一つの新たな知見を提供するものである。

第II章 デデリエ洞窟の概要

デデリエ洞窟は、シリア北西部（北緯 $36^{\circ}24'$ ，東経 $36^{\circ}52'$ ，海拔450m）に位置する。この洞窟は、大地溝帯延長上である死海地溝帯の北端にあたり、人類の進化を探るうえで重要な地域である。その死海地溝帯北端にあたるアフリンの谷の東にあるワディ・デデリエの中に2つの入り口を開けた洞窟がある。「デデリエ」とは、クルド語で「2つの入り口」という意味をもつ。洞窟の規模は、旧石器時代のものでは最大級である。遺跡調査は、日本-シリア合同調査のもと1987年からおこなわれている。洞窟内の堆積は、これまでの発掘調査で1層から15層までを確認している。出土遺物は、大量の石器、ネアンデルタール人骨、大量の動物骨、種子化石が発見され、これだけの種類と量が豊富な例は、数少ないことである。遺構としては、約100基近い炉跡が検出されている。

第Ⅲ章 デデリエ洞窟における石器群の検討

この章では、デデリエ洞窟出土石器群の実見による観察、実測を通じ、その検討をおこなっている。本論文で観察対象とした石器は、1993、94年度調査のもので、総数20,631点である。観察対象とした層位は、Pit, 4層から14層までである。これらの石器の中には1993年度調査で発見されたネアンデルタール人骨と同層位のもが含まれている。第1節では、出土石器点数について各層ごとに説明し、石器型式の分類定義について1点ずつ述べている。第2節では、石器群の観察6項目を設定し、その設定理由について述べ、観察から得られたデータを器種別、層別に統計的数値に表し、説明している。

第Ⅳ章 レヴァント地方中期旧石器時代におけるデデリエ洞窟石器群の特徴とその位置づけ

第1節では、第Ⅲ章での石器型式分類や石器観察データをもとに、デデリエ洞窟石器群の時期別変遷過程について述べ、その結果から、デデリエ洞窟における2つのモデルを提示している。1つは、石器製作過程復元モデルにおいて、一つの原石から非二次加工石器の素材と、二次加工石器の素材とが剥離される2つの主流をもち、無駄にすることなく、あらゆる器種が剥離される石器製作がおこなわれた可能性を指摘している。2つは、石器群の検討をもとに、動物骨同定観察を参考にしたデデリエ洞窟利用期間モデルにおいて、ネアンデルタール人がこの洞窟で生活するには、気候や動植物、石材といった恵まれた好条件を必要とし、こういった好条件は、石器製作に投影するものであることを述べている。第2節では、デデリエ洞窟石器群の特徴を明らかにするために、3タイプの石器群が見られるレヴァント地方中期旧石器時代の他遺跡出土石器群との比較をおこなっている。比較対象遺跡は次の通りである。タブンD型石器群であるタブン、ロシュ=エイソ=モル、ナハル=アケヴ、アブ=シフ、タブンC型石器群で

あるタブン、スフル、カフゼー、シュックバ、タブンB型石器群であるケウエ、タブン、ケバラ、ドウアラ、ティラト＝カルメル、シュバビク、エル＝ワドである。以上の遺跡における10項目にわたる比較観察の結果、デデリエ洞窟石器群は、タブンB型石器群の特徴をもつものである。第3節では、レヴァント地方中期旧石器時代におけるデデリエ洞窟石器群の位置づけを提示している。デデリエ洞窟石器群はタブンB型石器群であるが、それと同時に、タブンD型石器群の特徴である彫器を中心とした後期旧石器の石器やタブンC型石器群の特徴である彫器よりも削器の方が多く、裁断＝小剥離石器が見られる等の特徴を合わせ持っている。したがって、デデリエ洞窟石器群は、タブンD・C型石器群の要素を持ち合わせたタブンB型石器群である、と位置づけられる。

第V章 結 論

本論文の第I章において述べた目的である、レヴァント地方中期旧石器時代における早期新人とネアンデルタール人とをめぐる争点について、次の4点をもとに一つの新たな所見を提示する。第1点は、レヴァント地方中期旧石器時代の石器群についてである。第IV章第3節において、デデリエ洞窟石器群はタブンB型石器群であるが、タブンD・C型石器群の要素を持ち合わせていると述べたことから、この地方の中期旧石器時代における石器製作技術に大きな変化が見られなかったと推測する。第2点は、気候変化である。第IV章第1節のデデリエ洞窟石器群の時期別変遷過程において、デデリエ洞窟石器群は、温帯生息種動物が増え始める6層をさかいに、器種や数量が豊富になることから、気候変化が石器製作に影響を与えると考えられた。そこで、レヴァント地方中期旧石器時代遺跡の石器群と共伴人骨、年代を当時の気候変動線に対照することを試みた。第3点は、共存条件について提示している民族例 (F-Barth: 1956) の一つ「異なる民族集団は、それぞれ別の生態的地位を開発し、共生的な経済関係を打ち

立てることができる場合に、一地域内での安定した共存関係に入ることができる」というものを参考にした。第4点は、第1章で述べた先史人類学者等が提示している3つの仮説を検証した結果、本論文での石器群の検討をもとに支持できる仮説は、1つ目と3つ目のものである。以上の4点からまとめると、結論は、レヴァント地方にいたタブンC型石器群を持つ早期新人（アフリカ起源）とヨーロッパにいたタブンB型石器群を持つネアンデルタール人（アフリカ起源）とは、各々、独自の生態的地位を別々の地域で開発していたが、約7～6万年前の寒冷気候のために、ヨーロッパにいたネアンデルタール人が中東へ南下し、レヴァント地方、特に、中部地域に共存することになった。彼らが共存することができたと思われる理由は、快適な自然環境と、タブンC型石器群とタブンB型石器群との要素が相互に見られる石器群を持っていたことや、長い間、大きな変化が見られなかった石器製作技術とが共生的な経済関係を打ち立てたと考えられることである。ところが、共存生活を続けるうちに、同じ自然環境で、同じ様な要素が見られる石器群や石器製作技術を持っていたために、彼らは同じ生態的地位をつくりあげてしまい、共存が難しくなり、再び、各々独自の生態的地位を開発しようとしていたと推測する。約3.5～3万年前に、ネアンデルタール人が絶滅するという説を参考にすると、早期新人が独自の生態的地位を開発する好条件をもっていたため、生存することができたと考えられる。その好条件の一つに石器製作技術の大きな変化が考えられる。

上述の推測やデデリエ洞窟石器群の観察を通じ、気候変化が人類へ与える影響の強さや、それが石器にも影響することが分かった。人類は、自らの生きる環境をつくりあげるために、自然環境に適応するための条件を改良し続けてきた。先史時代におけるその条件の一つとして、石器は欠くことのできないものとする。そう考えると、石器研究は、自然環境の影響と深く結びつく人類における変化や、社会構造の一側面を明らかにする可

能性をもつと指摘できるが、今後は、石器だけからでなく、他分野の情報と関連づけた新たな研究方法を生み出す努力が必要である。